

翻 訳

呉偉明著、「香港人的日本観（香港人の日本観）」、第1回アジア未来会議
「世界の中のアジア：地域協力の可能性」（2013年3月8日～10日）報告論文

合 田 美 穂

1, はじめに

香港と日本の関係は、19世紀後半に始まり、既に1世紀半の歴史を有している。香港人の日本に対する態度は、戦前、戦後初期、中国返還前、そして、返還後において変容がみられ、その間、敵、友、模範、ネガティブな印象の間を揺れ動いてきた。本稿は、歴史的な角度から、異なる時期における香港人の日本観について考察したものである。

2, 戦前の日本観

戦前の香港人の日本に対する印象は、比較的ポジティブであり、日本を、アジアの強国、軍事同盟、そして貿易相手であるとみなしていた。この種の態度は、1930年代に日中戦争が始まるまでは、変わることはなかった。それは、まずは、日本が、最も早く近代化の洗礼を受けたアジアの強国であると崇められていたためである。日本は、明治維新の後、富国強兵を推し進め、日清戦争および日露戦争によって、列強に名を連ねることになった。幕末と明治初期の日本人は、香港を近代化のモデルとして参考としていたが、明治中期になると、日本はアジアの近代化の先駆けとなった。日本で働く香港人、香港で働く日本人、香港を訪問する日本人、メディア、書籍を通して、香港人は日本の成功を認識することになった。

第2に、日本が英国と同盟を結んだことである。1902年に日英同盟が結ばれる以前から、日本と英国の関係は良好であり、英国植民地である香港と日本は、軍事面でも協力関係を有していた。1894年以降、日本の軍艦は、毎年香港に寄航し、燃料補給と交流を行っていた。日清戦争の際には、英国船が、香港から

軍需品を運んで提供していた。1902年から1921年にかけての日英同盟の期間、香港と日本の軍事交流は頻繁になった。日本の海軍は、英国軍の香港の砲台や軍キャンプの見学にも招待された。同盟が解消された後も、1930年代初期までは、香港と日本の軍事交流は途切れることなく続いた。

第3に、日本は香港の重要な貿易相手であったことである。戦前の香港は、中国、日本、東南アジアの三角貿易の主要な中継港であり、その中継貿易は、香港の華人ビジネスマンと英国のビジネスマンが担っており、相当な収入を得ていた。三井物産、東洋綿花、三菱商事、日本郵船、正金銀行などの日本の財閥および大企業も、香港で莫大な利益を得ていた。日本の海産物、練炭、紡績品、茶具、マッチは、香港では絶大な人気を集めており、日本の銀も市場で広く流通していた。戦前の香港における日本の経済力は、中華資本、英国資本、米国資本に次ぐものとなっていた。

1930年代になると、日中関係の悪化によって、香港人に民族主義が起こり、日本人への態度も、友好から敵視へと変わった。1937年に、正式に日中が全面的に開戦すると、植民地政府はこれに対して、中立を保持しながら、在香港の日本人を保護する方法を考え、新聞における反日の言論をチェックするようになった。民間では反日感情が高まり、日本製品不買運動や日本人への襲撃事件が頻繁に発生するようになっていった。

3, 戦後初期の日本観

日本統治時代の3年8カ月（1941年12月15日～1945年8月15日）は、香港人にとっては悪夢の時期であるといえ、多くの人命、財産

が失われた。戦後初期(1945年～1960年代)は、香港人の日本統治時期に対する記憶はなお鮮明であり、日本への態度もかなりネガティブなものであった。戦争を経験した香港人は、日本人のことを、日本語の語尾に「か」の音が多いことから「㗎仔(カ男)」と呼んだり、日本軍がよく大根の漬物を食べることから「蘿白頭(大根頭)」と呼んだりして、更に、よくその前に「死」という字を付けたりしていた。香港流行文化にもまた、香港人の日本に対する戦時中の記憶が反映されており、市場には、抗日戦争の漫画および映画、そして、日本統治時代の回想集があふれていた。

日本に対する敵視および軽視は、経済面でも垣間見ることができた。1950年代、香港政府は、日本のビジネスマンには6ヶ月の滞在ビザしか発行せず、香港で投資を考えている日本企業は不便を強いられることになった。香港と日本の貿易は、1950年代初期には既に回復していたが、1950年代および1960年代の日本は、まだ経済大国として成長しておらず、香港への輸出は、生活雑貨や機器が中心だった。当時の香港人の日本製品に対する感想は、「安かろう、悪かろう」であり、「日本郵船はそのうち沈む」という諺が世間で流行するほどであった。日本文化への関心も大きなものではなかった。日本語もまた人気がある外国語とはいえなかった。

4、中国返還前の日本観

1980年代から返還前(1980年代～1997年)は、日本は、経済および流行文化の超大国となり、香港の経済および文化における影響力は最高潮に達した。香港人の日本に対する見方は変わり、日本は一変して模範的存在となった。1980年代は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の時代であり、アジア各地が日本から学んでいた。シンガポールとマレーシアは、それぞれ、「Learn from Japan」と「Look East」運動を展開した。香港は、特別なスローガンはなかったものの、政府は多くの研修団を日本に派遣し、日本の経営模式、基本建設、交通運輸、社会福祉、環境保護などに

ついでに経験を学ばせた。

日本は、香港の重要な貿易相手で、また、投資国となった。日本は、それまでも香港の最も主要な貿易国の1つであり、日本の自動車、電器、食品、衣服、機器は、非常に高い人気を集めていた。この時期、日本製品は、安物を代表するものではなく、革新的な技術、最新の流行、耐用性を示すものとなっていた。香港人は、日本製品を非常に好んでおり、当時、香港に十数軒あった日系デパートのほとんどが、地元のデパートの業務を独占していた。ソニーのウォークマン、ナショナルの電気炊飯器、シャープのテレビ、日立の冷蔵庫、セイコーの時計、トヨタ自動車などの日本製品は、香港人が最も好むものであった。

日本はまた、香港の主な投資国でもあり、1980年代のヴィクトリア港両岸にある大型ネオン広告は、日系企業のものが優勢を誇っていた。日系企業は、基本建設、財務、製造業、小売業において膨大な投資を行っていた。中国返還前の大型基本建設プロジェクトのほとんどに、日系企業が参与した。熊谷組、鹿島組、西松建設、清水建設などの日系企業が、海底トンネル、地下鉄、高速道路、コンテナ埠頭、青馬大橋、新国際空港を含む、大型プロジェクトに積極的に参与していた。日本の銀行の融資による作用も大きく、それは大型発展プロジェクトへの着手への後押しとなっていた。日系企業によるセイコーなどの電子、日清などの食品加工業、ヤオハンなどの小売業の勢力は、非常に大きいものであった。中国返還前は、一部の英国資本および香港資本の企業は撤退したが、日系資本はなおも増え続けていた。

ハード面以外でも、日本のソフトのパワーは、中国返還前の香港では、いたるところに見られた。日本のアニメ、テレビドラマ、ゲーム、音楽、料理は、この時期、深く一般市民の中に入り込み、香港人の生活スタイルを変え、日本に対する印象も改善された。基本的には、1960年代以降に生まれた香港人は、みな深く日本文化の影響を受けており、それは現在中年になっている人たちの集团的記憶と

なっている。日本へ旅行、留学、語学留学をする香港人も増加した。香港大学および香港中文大学では、相次いで日本研究学科が成立した。日本の流行文化は、香港人が地元の文化産業を発展させるために、特に参考にされ、かなりの程度の日本化さえも出現した。流行音楽を例に挙げると、1990年代前半の約2～3割の広東語の流行曲は、日本の歌から編曲されたものであった。

これらは、日中国交以来、日中関係の全体的な発展が、比較的順調であった時期のことである。尖閣諸島、教科書、靖国神社、軍票問題は、人々の反日感情を引き起こしていたものの、その期間は長くなく、反日活動などの参加者は次第に減少し、高齢化していた。若者は、歴史問題に対してあまり興味を持っておらず、自分が好きな日本文化に陶醉していた。よって、高齢者と若者の世代間では、日本への態度もはるかに異なるものであったといえる。

5、中国返還後の日本観

中国返還後の香港人の日本人への態度は、基本的にはポジティブではあるものの、返還前に比べると弱いものとなっている。原因は以下の通りである。まずは、日本の国勢が低迷してきたことである。日本経済は不振となり、政治は混乱し、日本のハード面での実力は大幅に減少した。日本の香港における投資、香港への観光客も以前ほどではなくなった。同時に、中国と韓国の台頭により、日本は、もうアジア経済のトップとはいえなくなった。

第2に、日中関係の悪化である。返還後の香港は、中国の特別行政区となり、香港人の民族アイデンティティも強まり、日中関係の変化に対しては、以前より敏感になった。返還後の日中関係が悪くなるにしたがって、香港の民間の反日活動も増加していった。特に、2000年代前半の靖国神社参拝事件および2012年8月の尖閣諸島事件の後は、反日活動はかなり活動的になった。日増しに親中に向かう地元のメディアの、これらの事件に対する報道とともに、日本を厳しく批評するものとなっていった。親中政党の反日の立場は更に明ら

かになり、最近では日本国旗が焼かれるなどの、これまで見られなかった過激な行為が出現するほどになっている。

その一方で、日本のソフトのパワーは、依然として強い影響力を持っている。その流行文化は、異なる領域で、米国、韓国、台湾などのソフトのパワーの挑戦を受けてはいるものの、香港の若者は、なおも日本文化を好んでいる。日本へ旅行や語学留学に行く人の数も、返還前を上回っている。彼らは、日中の歴史問題にあまり関心がなく、反日の高齢者世代とは、非常に対照的であるといえる。

6、おわりに

この1世紀半の香港人の日本観を振り返ると、全体的に言えば、比較的ポジティブであり、また多面的であるといえる。香港人の日本観の形成は、外在的な要素と内在的な要素が結合したものである。外因は、主に、日本の国勢および日中関係の変化によって決定づけられ、内因は、香港と日本の関係、および香港の中国系の人々のアイデンティティであるといえる。日本の国勢が強く、日中関係、および香港と日本の関係が良好で、香港の中国系の人々の民族意識が弱い時は、香港人の日本に対する態度は、友好になる傾向がある。その反面、日本が低迷し、日中関係、香港と日本の関係が悪化し、香港の中国系の人々の民族意識が強まった時、香港人の日本に対する態度は、ネガティブなものになる傾向がある。このほか、公的、民間、および異なる年齢層の、日本への態度も異なる。公的には、日本に対しては友好であるが、民間では比較的複雑で、好悪が並存している。若ければ若いほど、日本への態度はよりポジティブになり、高齢になればなるほど、よりネガティブなものとなっているのである。